

(11) 余市高等学校の運営総括

校 長 今 堀 浩

2021 年度 年間聖句

「愚かな者としてではなく、賢い者として、細かく気を配って歩みなさい。時をよく用いなさい。今は悪い時代なのです。だから、無分別な者とならず、主の御心が何であるのかを悟りなさい。」

新約聖書 エフェソの信徒への手紙 5 章 15 節～17 節

はじめに

2021 年度も新型コロナウイルス感染症が収まらず、学校運営に大きな影響がありました。今年度は寮生活をしている生徒に感染があり、本校の特殊事情ゆえの難しさの中で対応しなければなりません。また、新型コロナウイルス感染症による影響は、生徒募集にも現れていると考えられます。対面での相談は少しずつ緊張が解けてきていますが、パネル越し・マスク越しゆえの距離感はどうしても埋められないように感じます。そのような状況ではありますが、教育相談会に来られる相談者は、オンライン形式の学校生活よりもリアルな学校生活を求めて本校に関心を持ち、アクセスしてくれているように感じます。

財政状況についてはやはり厳しい状況が続き、芸術棟校舎や第 1 体育館の解体と、それに伴う機能移転による建築費用が大きく決算に反映されています。また、施設の老朽化による修繕費も大きな支出になっています。加えて 1 年生の入学者数が予算定員を大きく割り込んだことも大きく影響しました。幸い 2 年生は、年度途中の転入生が例年程度おり、目標の生徒数をそれほど割り込むことはありませんでした。

2022 年度は、地元の後志地域からの入学生が 9 名います。この新入生も含めた地元生の成長や卒業後の進路をきちんと出身校に伝えながら、引続き後志地域からも選ばれる学校となるように努力していきます。

1. 「建学の精神」に基づくキリスト教教育について

2021 年度の運営計画では、「定期的にキリスト教を学んでいくことを意識していく」「しっかりと日々の生活の中で礼拝での祈りを位置付けていく」「余市教会との関係をより深めていき、より多くの教職員と生徒が教会を身近に感じられるようにしていく」という 3 本の柱を立てました。新型コロナウイルス感染症の影響による活動の制限と対応に時間が取られたこともあり、全てにおいて達成できたわけではありません。それでも、余市教会の西岡牧師とともに学校の礼拝を守ることができたり、生徒が日曜礼拝に訪れたりするなど、難しい状況の中でも繋がりを模索することができました。定期的な学びの機会は設けることができずにきましたが、次年度は本校の宗教主任である高濱先生のもと、日々の礼拝において生徒に役割を持たせる取組みなどを検討し、キリスト教をより身近に感じられるようにしていきたいと考えています。

コロナ禍においても、キリスト教を土台とする「一人一人を大切にする教育」については、これまでどおり大切に守られています。

2. 教科指導及び生活指導について

1) 教科指導

2021 年度の運営計画では、「全ての生徒に必要な基礎的な学力を身につけてもらうことや探究的な学びを作っていくことを目指し（中略）できることから実践していきます」としました。生徒間の学力差が大きい本校は、長年基礎学力の向上が大きな課題とされています。

2019 年度から導入してきました ICT 教材「すらら」による自己調整学習の仕組みについては、

本校の取組みをすらら側から取材され、その様子が HP で紹介されました。またいくつかの教科で取組みを始めている探究学習（グループ学習）は定着し始めてきました。具体的には株式会社マイナビと連携した探究学習プログラムの実施があります。一斉授業と並行して探究学習（グループ学習）を行うことで、学力差があっても授業に集中できる環境整備を引続き模索していきます。

外部講師を招いた授業は、SMBC コンシューマーファイナンスと連携した 18 歳成人年齢引下げに伴う金融トラブルの授業、東京の一般社団法人 HASSYADAI と札幌のリサイクル業者鈴木商会とのコラボ授業で SDGs を学ぶ取組みが行えました。このような外部講師を招く授業は、効果を得られるように準備と振返りも含めて計画的に行えるよう、次年度も引続き取組みたいと考えています。

2) 生活指導

2021 年度の運営計画では「起こる事態に機敏に対応できる教師集団を作ることが求められます」としました。特に大きな問題となる薬物事件については、担任・生活指導部・総務委員会が進捗状況を共有し、事柄の把握と進め方を検討する形で対応を進めました。しかし、保護者に学校の判断や状況説明がなかなか理解されない事態となりました。より丁寧な説明が必要な時代にきているように感じています。

日常的な課題に関しては、発達障がい生徒を多く受け入れていることからくる難しさは今後も対応する必要があります。例えば日常的なマスク着用など、持続が伴う事柄は教員側の緊張感も必要になります。このような指導も大切にしながら、次年度にむけて再度教員間で確認し、引継いでいくことにします。

3) クラブ指導

2021 年度の運営計画では「クラブがどんな生徒にとっても居心地の良い場所となり、健全な活動ができるように指導すること」としました。従来から大会で良い成績を残すことより、放課後の時間の使い方や居場所作りとしてのクラブ活動を主たる目的としていることから、この方針を大切に進めてきました。体育会系のクラブは、第 1 体育館の解体によって活動範囲の制限の影響を受けました。文化系のクラブは、外部の指導者の力を借りながら活動を続けてきました。美術部は札幌の絵本作家、書道部は地元余市町の書家の指導を受けています。今年度もいくつかの部活を掛け持ちする生徒が多く、また、ボランティア局では生徒自らがアイデアを出しながら意欲的に動く姿も見られ、このような働きは、生活指導の面でも活かされることから、次年度も応援していきたいと考えます。

4) 進路指導

2021 年度の運営計画では「進路カフェをより充実した内容に」することを挙げました。今年度実施できたこととして、札幌のリサイクル業者である鈴木商会と一般社団法人 HASSYADAI と行った 2 年生に向けた SDGs の授業と、希望者の石狩事業所の見学ツアー（9 名参加）、札幌宮の森病院のインターン（6 名参加）、丘珠にある建設業者大地リースの重機体験会がありました。鈴木商会と宮の森病院と大地リースにはそれぞれ卒業生が 1 名ずつ就職しました。

今年度は、本校から北星学園大学への進学者は 1 名でした。進路選択の際に案内していますが、学校案内や口頭だけでは具体的な大学生活を想像することは難しいように思います。しかし、実際に見学することでより大学への進学に関心を持つ可能性があることから、次年度は大学、短期大学部に時期と規模を相談しながら、見学会等を実施していきたいと思います。

そのほか、入学時期による成績不足や、学園内推薦の条件をクリアできないなど、北星学園大学への進学を諦めた生徒もいました。可能であれば推薦条件の緩和や、別の方法で学園内推薦の道を作るなど、今後に向けた連携の可能性を検討していく必要があります。

3. 教職員の資質向上について

2021 年度の運営計画では、「今年度も教科指導や生活指導など時々の課題をテーマとした研修を行なっていきます」としました。今年度は、「1 年生 1 クラス 2 人担任制」や「観点別評価」

といった新年度に向けた体制などに重点を置いた研修を行いました。隔週で開かれる職員会議でもそれらの議論を行います。他の議題もあり時間が不足してしまいます。新しい仕組みを取り入れることに対する不安や疑問、効果など丁寧に時間をかけて話合うために、長期休暇中の研修会は大切な時間です。

また、北海道教育大学札幌校・臨床心理士との事例検討会は、オンラインでの開催も検討しましたが、実現できずに年度を終えてしまいました。2021 年度の運営計画でも記載していますが、「教員の生徒理解を深めるための最良の機会」「臨床心理士から定期的に事例を踏まえた助言を受けることで経験則だけでなく理論的背景に基づいた専門スキルを学ぶことができる」ことから、次年度には開催できるよう調整していきます。

4. 生徒募集について

2021 年度の運営計画では「インターネットによる入試・広報に力を入れる」こと、「地元である余市町や後志圏、札幌圏からの入学生を増やす」ことを挙げました。いずれも土台になるのは、生活指導や生徒活動の充実です。

前者については、インターネット広告（google や yahoo のバナー広告や YouTube の動画広告など）を 9 月から半年間実施しました。SNS や YouTube などに広告を出すことで本校の HP に誘導し、学校見学につなげることを目的としています。実施期間が短いことから、厳密な費用対効果の測定ができませんが、一定数の反応が得られたように感じています。2022 年度は、1 年かけて効果測定を行い判断していきます。また、従来のブログによる学校の様子発信など、5～6 分程度の短い動画を 15 本ほど作り公開して認知度を上げる施策を続けています。

後者については、新年度の後志・札幌からの新入生は 20 名（余市 5 名、小樽 4 名、札幌 11 名）となりました。余市や小樽の適応指導教室への訪問を増やしたことによる効果も考えられることから、引き続き丁寧に訪問活動を行っていくことで、地元からの新入生を増やしていきたいと考えています。

加えて、全国的に行っている教育相談会を 23 会場（62 組・103 名の参加）、都市部で開催される合同相談会（新聞社主催のイベント）に 13 回参加（85 組面談）し、本校の教育を全国でアピールしてきました。

そのほか、教育的な映画の上映（6. 地域連携参照）や機関紙の配布、通信制高校主体の合同相談会でのアピールなど、一つ一つの広報活動をより充実させることが大切になりますので、検討を続けていきます。

5. 教育環境及び施設整備、財政について

1) 施設・設備

2021 年度の運営計画で「3 つの老朽化した建物の解体」「現在の教室棟校舎の機能的な使用を検討」することを挙げました。

芸術棟についてはなんとか教室棟に吸収することができていますが、第 1 体育館がなくなったことで起こる不都合が顕在化しています。体育の授業やクラブ活動での運用が難しく、生徒にしわ寄せがいつている状況は否めません。引き続き、状況改善に向けた検討を続けていきます。

2) ICT 環境

2021 年度の ICT 運営計画では、「ICT 教材の活用を進めていく必要があり、具体的な整備計画を進めていきます」としました。コロナ禍での学校教育活動の継続を目的として、文部科学省から交付された学校保健特別対策事業費補助金を活用し、レンタルしたタブレット端末（Lenovo LTE モデル 40 台）は、新年度より教室棟の Wi-Fi 環境が整備されたことで、臨時休校時や自宅に Wi-Fi 環境のない生徒へ貸与するだけでなく、教室での e-Learning、オンライン授業や礼拝、保護者へ向けた行事のライブ配信など、活用の幅が格段に広がりました。2021 年度の同補助金では、2022 年度から始まる一人一台端末導入に先駆けて、タブレット端末保

管庫と非接触式サーモグラフィーカメラのほか、リモート会議用のマイクスピーカーを整備しました。このマイクスピーカーの利活用の一つとして、2022 年度の総合的な探究の時間において、米国在住のネイティブスピーカーの英語講師と遠隔でつながり、正しい英語の発音から学ぶ英会話の講座を開講します。

また、各教室の前方に遮光カーテンを設置したことにより、教室でもプロジェクターを使用した授業展開が容易になりました。情報科の授業におけるプログラミング演習はこれまでコンピュータ室のデスクトップ PC で HTML 言語を基盤とし CSS や JavaScript といった WEB プログラミングの演習を中心に行っていましたが、今後は教室でタブレット端末を用いて、Python など新たなプログラミング言語をアルゴリズムの基本構造から学べるよう準備を進めていきます。

3) 財政目標、財政改善の取組み

2021 年度の運営計画では、「校納金の値上げを行うことや企業寄付を増やしていくことを追求」することを挙げました。校納金は 2021 年度新 1 年生より 33,000 円に値上げ（これまでは 31,900 円）しました。新型コロナウイルス感染症による経済状況悪化の中ですが、就学支援金の上限に合うように授業料について見直しました。一方、企業寄附については検討を続けていますが、「寄付をしたい学校」であることをきちんと理解してもらうための資料やプレゼンの準備が整っていないことから、実際に動き出せていません。次年度に向けて、できることから取組めるように準備を進めていきます。

今年度の本校決算は昨年度より悪化する見込みです。入学生が少なかったことに伴う校納金や補助金の減少や、余市町からの財政支援の難しさ（ふるさと納税からの支援は期待できません）が影響しています。そのような中、新型コロナウイルス感染症対策として国や道や余市町からの補助金が、合計で 330 万円ほど支給されました。

財政的な見通しを持つことが本校の教育を続けていく土台になるため、支出を減らすと同時に補助金や寄付金を増やす努力を続けていきたいと考えます。

6. 地域連携、高大連携

2021 年度の運営計画では、「より多くの生徒たちが積極的に関わっていけるような地域連携の仕組みを作っていく」こと、「北星学園大学の学生と余市校の生徒がともに学び、体験する実践の場を作る」ことを挙げました。

新型コロナウイルス感染症の影響から、活動に制限がかかり実際に企画が立ち上がらないなど、地域連携も難しい状況が続いています。そのような中でも、総合講座「ぶどうのお仕事」では栽培した葡萄からワインが作られるようになっていくことから、地域のワイナリーとのつながりが深くなってきています。また、ボランティアで海岸のゴミ拾いを地域の NPO 法人と一緒にすることができました。9 月には「あこがれの空の下」という和光小学校の取組み取材した映画の自主上映会を開催しました。町内外から約 90 名の参加者を集め、これをきっかけに入学に繋がったケースもありました。

高大連携は、具体的な活動につなげることができていません。北星学園大学経済学部教員から、福島県の地震被害を受けた若者の進学先に余市高校の可能性を伺っていますが、具体的に進めていくには準備が必要になります。しかし、さまざまな意味で取組むべき意義を感じているため、具体化に向けて次年度には動いていく予定です。

7. 「余市高校の 2021 年 4 月以降の取扱いについて」の確認事項について

1) 教科教育の改善、生徒募集地域の転換及び大学との協力による内部進学者数

北星学園大学への内部進学者数については、5～10 年後を目処に卒業生の 1 割程度となるように努力します。2022 年度は 1 名が北星学園大学に進学予定です。

2) 後志圏からの入学者

2021 年度の運営計画で「具体的方針としては、後志圏からの入学者数を 3 年後には 5 名、5 年後には 7 名、10 年後には 10 名にするという目標」を挙げました。2022 年度の後志圏からの入学者は 9 名です。一過性のものとはならず安定した入学生を確保できるよう、地元の中学校への報告・訪問を続けていきます。

3) 寮・下宿状況について

2021 年度の運営計画に「新しい寮・下宿を作るための準備」と「財政的な支援として、ふるさと納税や様々な補助金を活用した余市町からの財政的支援、また企業からの広い支援を求めていく仕組みを作っていくことを追求」を挙げました。企業からの支援（寄付金）については、「5. 教育環境及び施設整備、財政について」「3) 財政目標、財政改善の取り組み」のとおり、具体化させるまでには至っていません。

2022 年度に女子寮 1 軒が閉寮し、新たに 1 軒が立ち上がります。また前述のほか、女子寮 1 軒の再開をお願いできました。しかし、充足率がほぼ 100%であるため、もう少し余裕を持たせたい状況です。

8. 中長期計画の進捗・達成状況について

1) 使命・目的及び教育目標

本校の基本的な教育方針の「クラス集団づくり」を柱に学校教育を展開しています。教員の世代交代も進んでいくことになるため、この基本理念の継承が引続き大切です。

2) 教学マネジメント

ここで掲げた①教科教育、②生活指導、③進路指導、④生徒募集(募集地域)の 4 項目は、着実に進めることができています。しかし、④の生徒募集については、毎年どのように変化していくか分からないため、引続き丁寧に取り組まなければなりません。

3) 管理・運営マネジメント

特に寮下宿問題について、具体的に見通しを持つように検討していかななくてはなりません。「間接的運営」については、収支の見通しも含めて検討し、可能であれば積極的に検討していくように考えています。

4) 財務マネジメント

何より安定した生徒募集が大切です。同時に、施設の維持管理費などの支出が見込まれるため、町からの支援につながる関係作りにも力を注いでいきます。

以 上